四書人大傳　第元輯　巻十

イ富4
600
253

南總里見八犬傳第九輯巻之十

東都　曲亭主人編次

第百十回

反間の術妙椿犬江を遠さく　妖書の辭仁妙真ハ辭別を

却説犬江親兵衛ハ濱路姫の鬼病のよりもち听ーより亳も礙設せず隨即守城の勤番を自餘の三士逆時良千景能ハ儘ーく遽ーく身装して立ぜんとせ一折ハ姥雪與四郎ハ悄語く知らるべく稲村より恁猛ハ召させあへば我ハ青海波ハ乗走らんとあく那里へ參るべ一翁ハ然あらる御用ハあらねば寛ハ出て來あれね因て憑むべるのみそあれ我身富山と中一より憶ハ紀綱ハ暇ゐければ。大母妙真ハ對面せば今番稲城へ參りとも尽ぶ俣留置れん狄是も亦知るべくにあらず更ハ又笑も不樂く思はれん我豫寫惜ハる消息一通茲ハ在り翁滝田退る是這消息を大母ハ見せそよと告て尉ゆあひ目今火急の君命を稟て言私ハ及び學ハ忠臣の本意ハ

あるねども。尚人並ふ俸禄を定めて賜る身なれば。徒ごとの事ハ許されもせぬ為ふ成るあるべし。
そもあらるさつ消息を含ませて遣ハ四郎をを受收めていろ〳〵趣あるゆゑ。先度の
夜行と同じかるねば在下ハ和君の馬ふ附て走るも益なんぬ既ふ日暮ハ紺ふ成りぬ在下ハ歩行ふ暮
ぬ路を歌店ふ就て明日稲村へ参りたいめ快く出さるべしとのふ親兵衛再説ふ及ぶ既ふて
逸時良千景能仁ふ別を告て伴當とびいそぐ皆悦雪ふ従ふて徐ふ来よと入付て単青
海波ふ乗り騎りて。館山の城を望る程ふ未の五刻ふ成りけり。ふ程ふ親兵衛ハ十数里の路程を経て
時許ふ騎走りて酉の五刻の左側ふ。毎く稲村の城ふ来ふければ。躰て本番の甲乙ふ就て任ぜ
えあげ。かの義成主ふ者到の神速なるを與ぶ馬を賜り。馬を厩役人ふ預け
とて。這宵親兵衛を身邊近く召よせて。対面ふ然而宣ふ。汝館山ふ在城して。その地ふ
無異なるや。既ふ其の時ふ。秘び思ふ。所是今番猛可ふ召来る所要の義ふ使を兼て加番の與ふ
遣はる甘屋八郎ふ。答つゝ。抑濱路姫が病者ハ物怪の祟と。医者の験者の祈禳も

今ふ其の效験を見ざ。汝ハ武勇世ふ比類なく且那仁字の霊玉を感得ふ。これ件の物怪を
鎮ん事。汝ふ為くのあるべしと人もハ我も思へり。明年ふ今宵ふて濱路が臥
房ふ宿直して試よ。勿論汝ハ。ふ見ふ十六七の後生なれども実ハ九歳の童なれ然ば奥ふた
ふ閨門ふ通夜して看病の婦女輩と共伴ふ侍ふも忌嫌ふ。ふ人の識詞もあるべし。什
麻ふ其の義ふ。せん。と。亦他事もなく。ふ親兵衛ハ困ずる面色あり。憂ふ。御詞美りぬ
必千軍萬馬の大敵ふ打向へとある御用なんぬ思ひの隨ふ克ぶ。ふ面目もなん。然ふ類ふ
ふ。煙の如く影の似く眼ふ見えるもふ捕られ物怪なるべいふして。輒く對治せ。
為ふ。ふ推辭なん。最も惶。御意ふ隨ひまつれ。勿論ふ。姫上の枕友ふ夜兵侍
らんふ影護を。何ふ。御病牀の次の間ふ宿直仕ぶ。とふ。義成主ふ。ふ開ふ
ものなるぞ。就て又一條の所望あり。汝ハ持ふ霊玉を濱路が臥房の箱ふ子の下ふ。土中ふ深く埋
いるその效速ふ。後々まで障事なるとの異人の教誨ありとぞ。ある婦女毎の告許ふ耳ふ

据あるかあらねば半信半疑決断あらず。されども御館山の忍黨が海の玉の光れ撲れ。轉倒氣絶
あらりと呼けば。その所以をとらへべくば海濱路が枕方に近つくるを欲せば。權且玉を我に貸れ責
と。あさうあり。子の下に埋措してその效をも亦試ん然りとて件の玉中に久く埋措んとあれば那物怪の對治せ
まそ濱路が病着癒りるべ合はさて返せべし。這一樁事は我意にあらば婦女母の云云と願へば
とても大人氣なりと思へりあらず談ぜるのみ苟且ながら霊玉を玉中に埋措れんとの數くら借りぞも
あらずん然りば坐席を擇ぶ縱濱路が枕方へとも便宜に儘して。宿直をせざるとられて親兵衛阿
とぞろに答難く沈吟ぶに。肚裏に思ふあらの霊玉は我身と俱に親の胎内に在り一日より自
然と得る宝貝なれば。牡鹿の角の束の間も人に貸せべるのあらねども君命なれば爭何いせん。終に姫上の
枕方に宿直して外樣の識誦を受んに優せべるのみとは尋思して。頭を抬げて稟せやう御詠の
如く這霊玉は生れ日より片時も身を放さるるべしとも祖母を年来御扶持の下に忍直る御恩を
思へば獻つるも惜しからぬ況一霎時の御用なる姫上癒りるまで埋措しのかと。素諾する項に

撤る。護身嚢を開き。玉を含ませて懐紙に載て恭しく受とり後方に
たべ。きみ者ら。とり。行り近習們は燈燭を秉て件の玉を左さる右さまに一霎時見て。ゆゆしく勝れる奇妙の美玉果て
あざれ。おのど。自然と仁字あり。奇也々々と嘆賞あり。鼻紙袋堂なる香匣に壯衣彼の喜果に登りて奥隷の死黨
に。ぐ。某申を遽しく召よせて玉を埋る事由を解示して宣のまう。這個玉を香匣と共に一箇の壺に納れ
又その壺を瓶に藏めて濱路姫の臥簀の下なる土中を穿ること三尺許。今宵速に埋させよとの世に
両に固と沿ぐ。奇貨なりとかり。笥に入れて砕くべくぞその事と做果るまで。濱路が病牀を外へ移して
埋る折に我を報よ。我みづから見て見んと。秘密合る者とヨク聚合て快くせよと分付て件の玉を遞與
あるべ。奥隷の死黨はあるべ果て退りの登時義成主に又親兵衛に宜まう。目今海路がのたくるを主を主
中へ埋る折に我みづから指揮をせべ。然べ心のとゝ見るべ。權且遠侍に退りて長途の疲労を休らへ
よ事敕。濱路が臥房の邊へ案内をまるのあらんその折宿直せよかと。叮嚀に課れ親兵
衛に欽びを稟せて遠侍に退りの程なく義成の夫人吾嬬前。今宵大江親兵衛が一騎館

山の城より來る事及守の所望儘しと那靈玉を貸まゐらせ衢ふ異人の教しとて埋措まゐらせまゐらせ
見ふ得ぬ物ゆゑ大々なるべし躯て專婦使をもて親兵衛ふ果子を賜り又美酒と餚數種賜
やそ疲労と慰めゆる程ふ夜の丑三の時候ふ成りけり浩然ふ甲夜ふ靈玉を預けられる奥隷の老當出て
來つ親兵衛ふ向ひて對して大江生ずぞ徒然ふ侍ん輙生が奉りする靈玉の埋果さう館のあるじ
きて亦一つ切れの心安く思ふべく因て五の君のあん臥草と故のごとふ做ん程より冬宵
より為身近う宿直を仕まもよとある御諚卒ゆく案内をせんとふ親兵衛異議もなく斉い美り
いふ後ふ〜べ參りのうと答て躯て共侶ふ濱路姫の病の牀の次の間ふ來ふけれい給事の老女出迎て
今番の夜敬を労ひるべ當下親兵衛ふ濱路姫の病惱輕重及物怪の障の有無を云云と尋
れば老女答て姫上ふ黄昏時候ふ當一ゑ〜ゑ〜獄鬼れうもあり〜の〜ゑ身の館出より來ゐ〜と宣て後へ
然るゆゑく只今睡ゐ〜ゑ〜と答る間ふ看病ふ通夜と侍る婢妾們ゆ幾名欲親兵衛を物の
隙ゆ偷看て仂今其〜聲を年三十可ゆ〜ふ出て親兵衛ふ對面あゐけり左右ゆる程ふ短夜ゆれば

短

與四郎ハ第五輯ふ世四郎とあるべきを本輯ふ世と與ふるあり所以ゆ後ふ至て詳し

寛の隙より亮耳ゆ庭ふ雀の聲ゆる時候親兵衛ふ暇を賜りて又奥隷の甘甲ふ引れて罷出ゆ
館の内ゆる編子舍とゆて休息所と定ゆれ這里ゆて早飯をたらべゆ豫臥簟ゆ儲てあり晝ふ勤務
もゆる身ゆれゆ權且睡臥ゆ〜ねと給仕児們の薦ゆるまふゆ躯て枕ふ就ゆけり程ふ皎雪與四郎ゆ
ふの目ゆ五刻過る時候親兵衛ゆ伴當の後れゆると厮俱ゆ稲村の城ふ來ゆけれゆ堀内藏人負
ゆ東六郎辰相奉りて問注所ふ召登ゆ則國守の仰を傳ゆて富山以來の賞ゆ白銀五枚を
賜ゆ龍田退ゆて宅看們を慰めて在留ゆべ月俸ふの餘の賜ふ大田小文五ゆ親文五兵衛の例を
ゆて那里ふて宛ゆ見且妙真ふ對面の折今番大江親兵衛と館山より召來ゆて當城ふ在勤の
事の趣と告知ゆて宜く他を慰むべと仰示ゆるゆ〜ゆ與四郎ふ大ゆる〜ゆ君恩と拜賜と受と
ゆて退ゆて親兵衛と共ゆふ他ふ昨夜の宿直ふ疲労れて天明て後ふ睡ふ就ゆ四のゆ〜覚ゆ
ゆ〜ゆ敢又驚ゆ昨日消息を遞與されてゆれ〜ふ所果ゆふ這里ふて時を移ゆふ要ゆ異
日又來て對面せんと思ふけれゆ親兵衛の伴當ゆを留置ゆて身の伴當のみを領て龍田を投ゆて

けり是より先ゐ義成主の田税力助逆友を使价として。瀧田の城へ遣て犬江親兵衛を召させ事那王のゆ夜勤のゆ且親兵衛ゑ宿直せより。昨夜い物怪顕れぎ濱路姫い丙夜より睡らせあひ一ゆまでも浅からぬ父義実主へ申えあげさりあひけり。小程ゐ親兵衛い未明の時候ゐ起出て與四郎ゑ来るゆ且白銀五十枚を賜りて休息の為瀧田の城へ遣されつと侍りて欽ぶと斜らぎ躰て浴湯一沐梳り夕饌を賜る程ゐ君侯成及夫人前より宿直衣と平生服と必用の調度を皆具て賜りけれゑ親兵衛い寵恩の隈ゐを畏て其の欽びを禀せずゐ姑且て義成主い親兵衛を召よせて昨夜の宿直虚一〻ぞの功あり一欽びと云云と宣いきるゐ義通御曹司い舎弟次丸と共伯母厳君の左右ゐ侍りゆひて親兵衛ゑ支毎ゐ茶と賜り果子或賜り過ゞ館山の事をきへち譚らひて夜ゞゆへ親兵衛い長沈日の更るを覚ぎ慰めまられる面目あまりありとぞ思ひけ。却説ゐ日も暮ゆけれゑ親兵衛い又濱路姫の臥房の次の間ゐ宿直ゐるゐ。今宵も物怪顕れぎ濱路姫い今朝より顔色も光澤ゐゐて心地清〻ゐく覚るとぞ白粥を食ゐ西ゐ番ゐ及びゐ吾嬬前欽びゆひて。今宵ゐ犬江親兵衛と夜勤の女房们ゐ東西を賜ふべ

ちとぞ午よりゐの誄を命せられ赤豆飯煮染物剛髪亂魚の塩炙石決明の膾博京ゐ濱防風の醋茹蒸果子餅等ゐを五六箇の折櫃ゐ装做てその甲夜ゐ賜ひけれゑ婢妾们い欽びて先親兵衛ゐ分て薦め各〻賜りて茅出ぎ宵とぞ思ひけ。侍りけれども親兵衛い暮るより旦るまで端然とて外覩もせぎ婢妾们ゐ稍狎れてゆひ被るもゐ絶ゐ応ぜざりるのゑ要るれば這方よりゆひ。ゆひとゐ寄りけり。ゐの次の日ゐ瀧田より老侯の使として蛮崎十二郎照文ゐ稲村の城へ来て筒様筒様と御意を伝へ親兵衛ゐ夜勤を労らり〻銘茶と乾果子両壺を賜り且五の君ゐ病者の稍癒せゆるゐ欽びを云云と申えゐ義成ゐの主を申ゆひて照文を召よせて老侯の安否を尋れ親兵衛ゐ東西たまへせ。欽びを云云と申えさせゆひ語の次ゐ物怪退散ゐるゐ欣思ひゐ倍せ濱路ゐ容體恁々と解示して是まゐ霊玉と親兵衛ゐ奇功を是ゐのよりを厳君ゐ詳ゐ禀せとぞ躰て暇を賜ひけれゑ照文い退ぎて又親兵衛ゐ對面の折妙真い恙もゐくて再會を

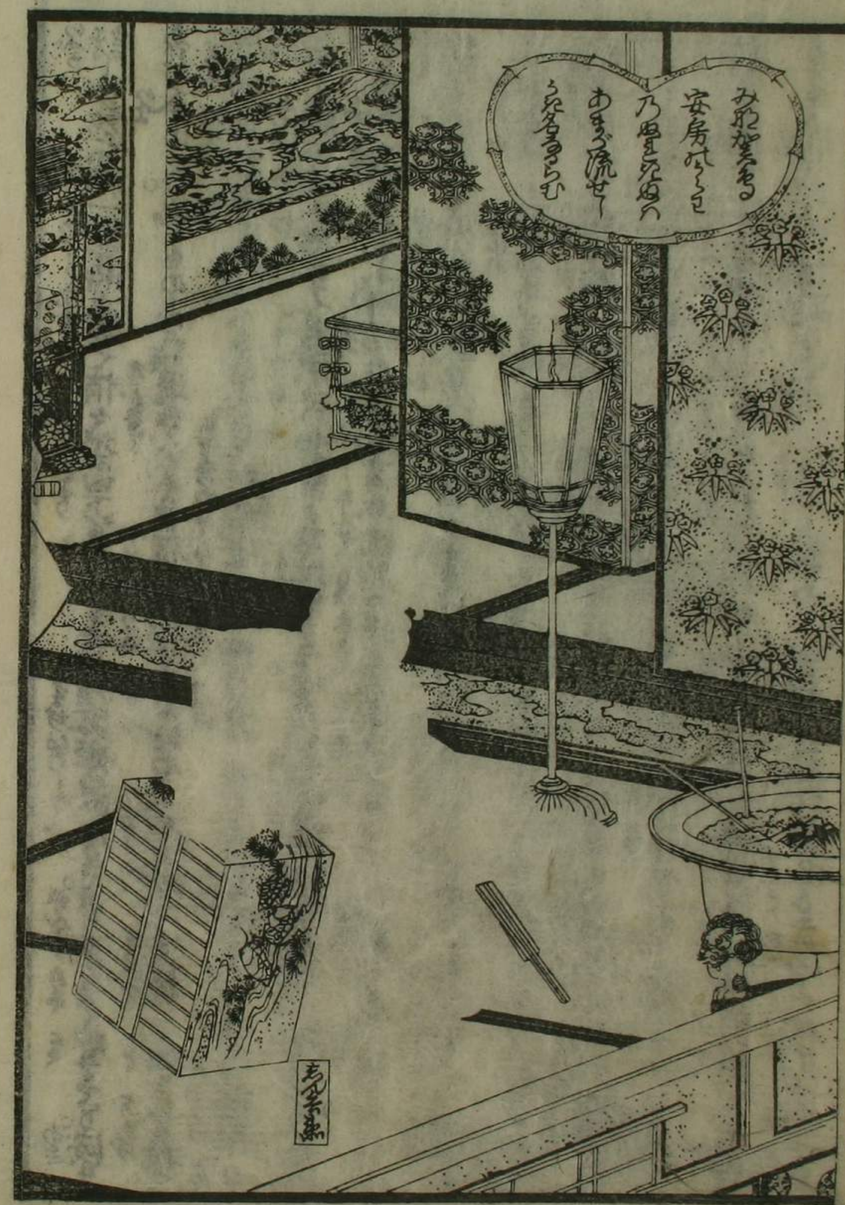
俟事の情又與四郎が文五兵衛が甚吉子舎を賜りて音音と媳婦们と両個の孫と倶ふ住
へば妙真各置ろ〻舎と檐を比べて僅ふ壁を隔るのみ旦夕送ふ交加れば詞敵のヨヲ侈ふ告知る
ゑどせーが親兵衛が心あちあて左ゆも右ゆも我二柱の君恩と稱へ今番又思ひ設ふ老侯より
東西賜せーたの狡びを亨ーゆひ姫上つゝ疼可ぞその折暇とあつて見参ふて入るべれとふふ
照文ろるて別を告て伴當と倶して濱田へ退りけり是より濱路姫の病者いよ〻平ぜあへ親兵
衛が宿直せーより絶て五六日の程ふ三ゝびの饌も生平ふかゝ〻ぶ氣力ハ日毎ふ清ゆ亥れぬまゞ日數を
経るふあゝねが浴湯結髪ゆ去あいで。るゑ無龍てなりーませが親兵衛ふ對面あゆいぞ只他がめらの
折ゆの聲と呼ゆのみ遮莫那物怪へ夢ふも正ゆ亥れい宿直の醫師奥隷の甲ひあい夜勤を
免ーゆるのゝ親兵衛をのみ初のぞ夜い次の間ふ侍ゝーゝ然ばおん二親胞兄弟達の勅ぶいへば
ゆゝ給事の女房们の爲て狡び男まあいゆく書い雙陸歌骨牌貝合るどとして長沿の徒然茂
慰めまゆゝせ。夜い亦物ゆく讀む女房ふ源氏物語と讀ゝ听ゆふ其も甲夜の程のみ也約莫二更の

左側より曉るまで熟睡ゝ一ゝびも覚ゆるい嬶親们の夜勤ゆ大ゝゆ退けて枕方ふ侍るの二両個ふ
ゆ去ゝど其ゆゝ心怠りゝ倶ふ睡りゝ曉る天と知らぬゆ間ありけり亦程ふ親兵衛い宿直ゆゝ七夜ゆゝ
五の君既ふ癒りゆゝ在ゝゆゝ暇と賜らゆゝふ自果ゆゝ〻ゝの〻ゝけれ勤栄ゆゝ夜と守る
間ゆゝ怠ゝ氣い倦心疲れて連ふ恥と催せと勉めて睡ゝと思へども堪ゝけれ臂近ゆゝ雙陸局と引寄
ゆゝ面杖衝て寝るゆ知ゆゝ侭一両番時打恥とけり然ば又義成王の五姨前もヨゆゝる息女達のゆ中ふ
濱路姫い仙ゝ時暴就鳥の爽危ゆ徃方も知ゆゝりゆゝーゝ世ふ亥ゝ人と忠ゝ絶て年來と過ゝゆゝ料ゝ蛍
崎照文が甲斐州ゝ倶ゝ来ゝ去て這地ふ還ゝゆゝ八入ふ増て慈愛
ゆゝ通ての親の情ゆふ今番物怪の祟ゆゝ命危かゝ比不測ふ異人の示現あゝ物怪い箇様々々の
怨霊と呼ゝゝ大山寺ゆゝ衆徒ふ課せゆゝ名曳が怨ゝ解脱の爲ふ水陸の好事と執り行ゝ具ゝ親
兵衛と館山の城より召来ゝて宿直と命ゝ〻ゝ侭物怪鎮りて濱路姫いとゆゝ病悩平ぜ
ゆゝふれい隨即沙崎明神の社及役行者の石崖富山寺峯上の觀音伏姫の墳墓へ賽ふ願ふ侯

若し遣れば後々まで障りあるべし姫上命運長久を祈らばこれ日より五日嬬前へ参らずもいざ義成主の夜を安く人定より枕を就けて睡りあるべきなり親兵衛が参りしより第七日とは夜を迫りて何となく寝苦しさに睡りかねて短夜の深き隨に胸うちさわぎて平生覚めしかども濱路が病着の更に危窮に及びしかば然るべき又物怪の立顕れて悩を狭什麻親兵衛に向ひ近習仁を遣はして安否を尋問せばと尋思を巡らす次の間に臥る近習某甲と呼覚えとく遽に頭を抬げ見れば既に小夜深て四更の二三の方僅響にて怒る他仁を遣はして問てさせるもあらず徒に這那の人数へ驚き怪事に益なきを疑の心より暗鬼を生ずるなんと笑れもせず悔かるべし所詮我が身に那里の安否を探り知るに若くはなしと思かへ横を搔遣り身を起して枕方なる腋指の刀を帯て次の間なる紙門を推開て開首に有る提燭を乗して行燈の火を移して開を推て遥なる幾間狭獨うち過て奥と表第の間なる関の銷を推ひらかんと思ふも似合ねば訝りなく找入りて濱路姫の臥房なる次の間に来て見れば燈燭の光幽にて親兵衛は這里に在ぬ

訝しけれども尽一霎時立在て悄々地に四下を見まわす玉八は濱路姫の臥房なる男女の耳に聲をも潜まず

「今ちらに見ぬ程に退去んとまでは程に弗憶く東物あるを脚に機を又訝りて悄と今抗て提燭の火光に照らしつつ是則艶書標識具をねどもあるを疑べくもあり反濱路姫の迹を親兵衛に贈るを義成主に勃然と忽地怒りに堪ざれば先那奴仁を推並べて殴るはせんと只管に惴る心を強く推鎮めて君子の本性胸に深念に在暁の月を待つ這艶間を人目を忍び懐へ夾めて偷歩して臥房へ入りのぞきを那里に夜勤の婢妾仁も這里に當番の近習仁も短夜を貪睡して皆夢にも知らざりけり小程に義成主は単臥房に入りて坐して文を頭を傾け熟思惟に親兵衛に勝れて身長七十六七の後生像く乳生年九歳の孺子乳母婦女子の中に置くも淫奔なりしを思へば我浅慮を形體と倶に心さへ大人備て早晩に色情い起りけん約束男女の密会は倶に死刑に処す法律に明文あり他仁情由を人知れば我は許さんと欲ども助け給ふに罪過なるを幸に人に知られざるあらん方僅這艶間の我に落ちは他仁に與に主


みわたせば
安房なるこえ
乃里とかぜの
あまぐ流せ
らんたるらむ

親の恥を捺滅さんとぞ思ふ濱路が左まれ右もあれ親兵衛世に早る豪傑の素質あり且犬士の一人
なれ自餘の犬士は先さきて我が住む両三年大功あり者るを思案の外と俗もいふ這情慾の罪を糾
可惜犬士は疵を附て後世までの遺恨なるべし所詮中と刻発遠離て他们ら惑の醒し折召返さ
ことわりとは奉るも主意決りければ枕方に罪直のなる提燭をもて件の艶簡を推閉め燈燭の
上に聲しめび發と起升し炭と共に提燭を吹滅して遠く擲遣り腋挿の刀と又枕方なる刀架に
拭耳て炮さこび枕に就ぬ寛仁大度の賢君子竟に睡ぐ明る天を今か復寝の床に不娛き涯
なるろけの慈而その詰言義成主い親兵衛を召近着けて左なる近習を退けて宣ふ濱路が病着
癒りて物怪も亦退散せしまゝ汝が功ふして那霊玉の奇特もあん濱路ちゝまご浴湯せば病の
脉に在りとい共既に本復ふ及びぬ今日より夜勤を免べし就て我思ふもあり汝い仆て時ろ伏
姫の霊の擁護ふよりて富山の奥に生育られば関の東西なる諸國にゝ這安房上総の地理ぞも
知さる所ヨ多ふ所べ且自餘の犬士们い年来汝ら所在を索ふして八人具足せるまでい参りかゝと幾回。

推弊あすの時ぞ多ふ三四の犬士们い去歳の冬より武蔵なる穂北の郷士来垣甘太甲とぞんが家に
寓居せるの餘那犬坂毛乃亂智ふ往方いまゞ知れぞとぞ又大川荘八大田小文五三毛乃が所在を索る
と甲非文の石木の指月院を立出ぬる穂北い尚来會せざるよ曩ふ蜜崎照文の僧ふよりて
知りぬる那信乃道節現八大角い今も為に穂北なる郷士の宿所ふ淹留せるその後のゆゝ縁
ども他们い年来汝の所在を索難く在らんふ汝が我ふ住るよりと告ゆ遣らぞいふ不義ふ似さ我がの
春い照文をもて件の宿所遣て信乃们四犬士の安否を訪し且毛乃们三犬士の来會せ狗不
問ぜんとぞ思ふ義道が身ふ禍鬼起して素藤と征伐の軍陣ふ目を弥り且濱路が病者物
怪の祟ふ因て三春と空ふ過ぬ信乃道節们を訪る暇わ破れば汝穂北ふ到て信乃道
節現八大角が今ぞい那里ふ在るぞい對面て徒さその身の上を報知もべく那首ふ在ぞい
往方を索ぞ犬士八名具足の日ふ厮伴ぞかゝ参らば單舘山の城主ふ到て上總ふ在る勝ぞ
因て汝い遊歴の暇を只今取るまで一ふ関の八剣ぞ送るまく歴覧もべ一ふ七犬士を索て俱ふ遷り

来よと任られば急に立去て寛く還るを妙とすべし。然れば汝が秘蔵の玉を今返すとも詮なけれども、いかにせん濱路は夙く微牀せし。且汝が這里に在らざりて、復物怪の障りあらば何とかせん。まづは禳んや。縦汝在らずとも、玉を那佗埋措かば然る障りはあらずなるべし。左右ゐ心の至り所あれど、汝がかの氣ありつ那霊玉を我に預けしを知らずて、ただ二重の瓶に蔵めて土中に瘞られ、火災盗賊の患ひなし。奴是は納戸財宝庫を盤纒の與に取らするなり。その立意を汝よと叮嚀に情語を示して、黄金百両紙に包を折敷に載せて、合ず出て與へ給へば、親兵衛は遽しく膝を找め受載て身を退りて、喜びて聞えしは、御諚の趣辱く、都て某らは微臣一人七犬士に先だちて、続まで御恩を蒙りまつる。実に本意ならざれども、御當に老侯の御危難を富山に拯ひまゐらせしより、素藤對治の事によりて、憶はずも紈袴に繋されし心苦しさに、今遊歴の與に身の暇を賜ふて、自餘の犬士們を倶して帰参れとある教命は、宿に臣なるが幸ひなる。況路費の金を御みづから親賜はする寵恩深篤、身にあまりて辭を取るに物もなき感涙の外なれば、又霊玉の事は既に知せ給ふごとく年来奇特多かれば、その身の護にはなれども、君の與には一命を献るとも辭

まゐらせば、然るを知那玉の御用に達ひ、是亦幸ひ微臣かへり参るまで埋措せ給ふべし。左らば今日啓行を仕らんず。勿論なれども大母が月来俟ことびんをあらでは、の依別るべし。後の歎きも不便なし。一両ヶ日は瀧田へ立寄て、祖母妙真に對面して、徑に發足仕らんの義を許させ給はんやと聞えせば、義成主沈吟て、それは餘議なきのなれば、瀧田に逗留すべからずは、妙真に對面せで、速く退くを佳とせん。老侯も親しくその是等のよしを傳へ、あげて意ならで汝が遊歴に伴當のよしなれば、在て路次の煩ひならん。暇兵を撰て二両名倶しもて、且く其は便宜に傳せよ。快く退出よとぞ、身の暇を賜ひければ、親兵衛は額衝て、送るる御懇命肝胆に銘してあるべからず。願ふは貴體恙なく、猶良善の政事をもあそばしくれと、只に義成縣顕あらで、うち絶るぞ。快退りねと仰に、親兵衛向と坐して、賜の金を懐へ收めて、軀て立ッ鳥の跡を濁さぬ春の池庭の蝸垂木の樹下蔭暗く、及身に凝ひの帷をかくる松に蔦、黄雑墨画の杉戸推開き、廊下よりぞ退出ける。尓程に親兵衛は既に思ふよしあれば、その朝本番なる甲乙にも別を告げ、ぞ猛可に仰を宣示たまで、瀧田へ赴くとのよし知して伴當們を召よせつ、青海波の馬を牽して二三の城門を出る程に、肚裏に思

錯

今日君侯の仰を左も右もなろうれば那物怪の退散と濱路姫の病着の稍癒るひまだ宿直の役を免されぬ。然るに又館山へ返れぜ剌猛司は遊歴をよそ身の暇を賜て瀧田の大毋の宿所ふもう一日も逗留せべぎと捉さをあれば故もあるべかり。言ふ出しめ。ども我を疑ふ追放ちゆるゆん然ばそ身を取て毫毛ばかりも疑ふ受べ覚るれ。餘の大士ふ先こそ大功ありしと嫉る者更ふ瀧田ふ立入りて婢妾們と二刻ふ夜勤を仰付れを婢と恵侯人が讒言とそ。君侯素より賢明を侯便利ふ小人を信ぜれゆべくもねど衆口ハ金を鑠し市ふ三虎と教をとふ古人の常言ふあるかな。功成り名遂て身退くハ是達人の用心を生涯無異の捷徑なり。誰も知りなる上なれ。俸禄富貴を貪りて退くことを忘るとハ猟禽盡て狡兎死て弓藏れ平家古と義経讒死を栄枯得失今昔一致なれば敬馬くふ足れぬ。我里見家ふ仕へ以来ふ三十餘日ふ過ぎ。上總の館山ふ城を預けれしを尚一撮去来色もなる。坐席格式一とて定められるなれども那折とりて兵權を一時ふ受る濡衣を乾さ。這地ふ住りて仕の途ふ入べ。と悄々地ふ胸を決めて第二の城門を出ふ伴當們を牽向ふ。そ例りと乗りて葛飾地ふ瀧田を投て走らるふ素より駿足なれ。幾里の路の程と思ふの隨ふ無着て。遠く瀧田の城ふ来ふけれ。躍て馬より下立て番卒們を呼ての。我犬江親兵衛と大毋姉真許赴くふ伴當の後れ。一両年時這馬を駆て。妙真の宿所へ。程ふ狭那里ぞと問べ。番卒毫も礙ず。説ぜ。隊ぞ知る武功の大士親兵衛ぞ。一両名遽ぞ立出て。仰ぞ。姉真尼姑の宿所へ。我們案内を仕ん。卒ぬと答ぞ。一卒ハ馬を牽入れて。増城の内ふ駿ぞ。一卒ハ親兵衛の先ふ立て。御道を。くもりーぶ尋ねもうぶ。二の城門をぞ過て又一町ぞ。柳巷路と喚做ぞ。邊ふ諸士の耳房ヨ。そ。開ぶ。舍屋ふ空地あり。空地の北ふ茅茸る一廉小舍ぞ。竹笆を折繞らなる両折戸の頭ぞ。番卒急ふ歩を住め。親兵衛を。ぞ。尋ねゆふ妙真尼姑ハ即這里でいと誨て。躍て。辭別れて。走りて正門へ還り

やくと親兵衛の労ひて祐ことる野袴を引伸ゝ両折戸を敲ひて連りに喚ひ程に妙真奥より立出て応ことも
と戸を開ひそ親兵衛を見て訝しげに那里よりぞと尋れば親兵衛も左見有て扨身は是大母様のたびや某は
大八大江親兵衛でひそと名告るに妙真胆を潰して相ることの約莫半晌許忽地に合涙て原来和殿は親兵
衛ゝ狭六稔富山に在りし程最も大ひなる恩と人の噂に聞ひ子
ぎひ衛に姥雲翁とて消息を寄られて相見るごく尉ひ先這方へと愛ゝ敬て坐席に請登れば
親兵衛の刀を解て後方に置ひ共に妙真ふち對して我人いの母比ゝ偽も告せめ件の暴に時の不祥を
憶ひ別れしゝ夢ゝと思ふ稔歴て浮世出ひ神女の擁護快見参に入ゝと思ふる日ひ
ゝ仕の途に入りしゝ我私を顧る暇なければ昨日まで空に過せ胸苦しい一日も千秋に異ならぬ
ぬに時至りて恙も在ぬ年頃の欲ひ何事ゝれに優ぬ宜に芽出ゝ辱ひ再會ひそひ嬉しへば妙真
點頭のゝ涙に咽ぶ難ひ顔を背け両袖を絞るゝりの行潦ゝ相見ぬ狭ひ就て又深ひ
歎ひの杜も今願事遂ひ對面に泣ゝと屢目を拭て喃親兵衛你ゝ三度の大功に蛮崎主の與四郎翁

も告知めひ咱併ゝ年来二桂の刻館に受ゝ御恩を聊返ひと思へ然も身の幅の廣ひ世
界の二人と云ひ孫と思へ又その親のゝ胸に浮れて泣ひ老女の愚痴ゝ人你の
與ひ外大父様覚てゝる行徳ゝ故の古那屋の文五兵衛翁今まで存命ゝ愛ゝ敬れ
んに苦海愛河の世に定ゆゝく弘拡言の船出遠ひ別れゝ住ても住ても假の宿りと知りゝ返ゝ成人の
なりゝひ徳ゝ像身のあれゝ哺親兵衛のゝ益ひゝ見れ思へ你の面影幼稚貌に耗ゝ
鼻梁のゝとく融りゝ特に眼睛の清ゝ房に肖ひけり又めのゝて笑折に片靨面見ゝ何
沼菌に肖ひ四個の親身父ゝ母ゝ外戚の祖父ゝ黄泉の行客となりて孔稔六稔の今日まで殘ひ我
這身軍に思ひ難ひ哀歡苦樂遣る瀬も無ひ恩愛の覊に絆ひ親兵
衛然ゝと慰めひて目を數瞬ひ鼻をうちかゝやと大母様に思召まん歎ひ理に成ひ我身二親と
喪ひ僅に四才の比ゝとよ名のみ知ひ面影を照さり無ひ水鏡深ひ懐に汲て父も母とも大父とも
見なるに身のゝ益ひ悲泣に心を屈して病ひ煩いに成ひとへ妙真頭を抬げて然也々々に成ひ嘻

鈍すしや言ふ紛れて些茶をだにもまゐらせざりし那炊婆ハ那里ふ在る親兵衛阿鍛ハ欲しからぬを先生をすゝめ
らせんとのみ立を推禁めて否閑しめかしいまだ何も欲しからぬ偶参りぬれバ緩安ふかうち譚ぞて慰めまゐらせ疑
るれど畜いぬふせん猛可ふ君命を奉りて今より他郷へ赴きぬれバ立かへり来る日ふ又見参ふ入べきとのみふ妙真
呆貌して开ハ亦本意なるぬうなりし濱路姫上ハおん病着の瘥させたまひし歟他御へ御用ハ怎麼なるぞと問
ふて親兵衛然ハ那物怪ハ鎮りて姫上瘥りあまひぬ因て某と同因果の啞ふえなる小文吾大田主ハいふ犬塚犬
山犬川大飼犬村と倶ふ六犬士或ハ武藏の穂北ふ在り或ハ甲斐の石禾ふあり獨犬阪毛乃胤智と喚做
なる一犬士の所在知れずといへども尋て從るく将て来よと仰付られぬといへバ妙真領きて开も亦餘義なき
なる者ハ武藏へ赴き便路なれバ你の舊里下總なる市河へ立寄て依介許諾ありて水澪ハ咱們の姪なる
你の與ふも親族を件の夫婦が正首ふ折々箇牘もて安否を問し東西なぞ贈来しつおなじく
ねかしとなふ親兵衛異議もなく开いおそろしで得るべ伏姫上の神灵の宣示もあるものを依介多くかし由豫
吵知り侍りぬ然らでも両尊の墓参をも必ずしもべく思ひ侍れバ那里へ立も寄んも勿論ふかし拯花咲翁

媼音音與四郎と娘婦孫達ハ恙もなしや宿所へ近くハ歟と問へバ妙真頷きて然れバ那人々を置きて処ハ壁一
隔隣ぞ内ふ通路も侍るなり一家児ふ異ならねども今日富山なる伏姫上の御墓詣ぞて峯上兵観音
へも参らんとて老夫婦が両個の娘婦と両個の孫を倶ふて早旦ふ出て行ぬ那音音の刀自も曳手單
節の胞姉妹も懇切ふ間なく時なく交加て六稔你と共侶ふ富山ふ暁しつゝせる事を説もふそて尉めら
きしふ折の左くて一人も宿所ふ在らねバ返て来よかしと听ならバ最酷う送憾くぞ思ハれんとのふ親兵衛眉をぞ
顰めて开ハ最殊勝の事なりし那人々が還り来バ親兵衛ハ君命を稟て他御へ赴きぬと傳へたまひね。
とふ間ふ炊婆が茶を沸らして汲のて来て先親兵衛ふ薦めつ又茶碗ハ鹹ぞ塩打の豆なんぞを今も世話ふ
公実房州の荼倒れ地方からとそ東西もなき質素ふ過ぎる款待ハ婦人東道の造作ふ意の似ならう其見参
けり姑且して親兵衛ハ勒肚の財囊より金一裹を出しててれを妙真ふ薦めてなふきかるべ欲る東西ぞあるに是をぞ
やてまゐらせ東西ハなきぞなれ我君より賜りたる二百金の半分ぞ卒福分を任らん欲る東西
求めあそかしとなを妙真吵あへぞ开ハ亦要なからかしが當御館より這年來扶持賜りて奴婢をも隷置し

妙吉

今日逢ふ別れ難し語連
今日相ふ涙殫し一連
吉乃

ゆゑ〻自由ならぬこゝろ。況往日稲村様の這里へ凱陣なされ折咱併を近く召されて伶の武功を褒め玉ひて多く白銀巻絹を賜ゝれども。そゞ伶に使いで今ゆ有るべか〻。然るをその金何ぶ共と推辭親兵衛爲ども。そ〻弁ハ然るゆゑ伶こんゞ盤纏多ゝ盗賊の殃危を惹く媒妁なれば姑且〻預け置あり。と。ゆゑ妙真固辭難て渋〻金を受給りけり。登時親兵衛窓ゝ仰ぎて日のいと永き時候なれ〻憶へ。ぎ時を移りけ。是ハ酷く敵後左ても右ても書無き名殘身の暇を賜るべ。とゆゑ妙真含泪て答ふ等〻。貌見ても切て一宿留めもせぎ世ゆ武夫の治習とそ苦〻しゆゑ。ハ仕の途是を思ハ又原の船長の母と喚れんを倒ゆ樂〻かゝべれ。喃親兵衛今宵出船ゆ乗る迄あ〻ハ幾比かゞり来ままべと問れて親兵衛阿とぞうゆ答難ゝる身の往方那濡衣を乾さゝ〻ゝ安房の浦邊ゆ立ゝ寄る白波へありとても我還る日ゝ為ゝめと。累りのゝ〻然ゝ氣と見せ沈吟ゞゝる頭を拾げ。然ゝ今ゝ去尚を料るゆ武藏と市裏ハ隣國なれ。往還輒くゝ但犬阪の在処速ゆ知ぎい日を過ゞ狭遲速ゝ定めゝけれ。然ゝと歳月を累ゝるゆゝ寛ゆ等せのゝかゝとのゝて刀を掻含て衝建て安く身を起ぎ妙真へ〻人を涙と俱ゆ〻めかゞて端近ゝ送り

復

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ。

ゝ。伴當ゝを訪れ。親兵衛ゝ意ゆゝゝゝて。不乗馬ゆ。伴當ハ正門ゝ。増城ゆ置ゆゝ妙真領ゝて。ゆ〻ゆ有れども。你い萬支ゆ心徒の神〻ゝ。初旅ゝれ心ゝと。餘の天士連ゆ環會ゆでハ旦夕の食物足曳の山踰海川の津ゆ小心者〻と。心ゝ屬ゝ。親兵衛ハ一説ゆ及ぶ話て。弁ゝ〻ゝ。みゝ〻ゝ愛て恙ゝ。ゝ〻ゝ。ゝ日ゝ。ゝ復見参ゆ入ゝれ。ゝゝ答も隱ゝ。ゝ果ゝ名殘ハ血筋の誠親の又親子ゝ。又子ゆ。愛の情も厚氷解て流れて〻く水と人の往方の定ゝ。盈虧ゆ迷ゆ鴻を光と夜の鶴ゝ。哀ゝ。

第百十一回

妖尼庭ゆ泉兇と聚ふ
素藤夜舊城と襲ふ

却説犬江親兵衛ハ祖母妙真ゆ辭別れて城の正門まで来る程ゆ吸ゝ。後れる三個の伴當ゝ折よく這里ゆて赴着ゝ。是ゆゝ親兵衛ハ正門の守屋ゆ立寄て那両個の番卒ゆ教ゝを演ゝるゞと預け。馬を鑣奴ゆ牽出さゝ。兼ハ世ゝ。炭ゆ浦曲のゝ〻ゆ。ゝと絶ゝ一町許。伴當ゝ〻ゝ。若ゝハゝゝ知ゝ。我ハ今朝悄〻ゝ君命と稟られ單他郷ゝ赴くゝ任れ去向ゆ伴當ゝ〻ハ倒ゆ宜ゝ。因て若ゝ三名ゝ又

稲村の御館へまゐて左右の人々に件の事を報て館山へ還る。却て這馬の稲村なる厩役人へ事の初めを預け置れぬ。されど日の暮るゝも必歌店に就べくもあらず。夜の深るゝまで比老侯より拜領の名馬を乞れ若人路や日の暮るゝも必歌店に就べくもあらず。夜の深るゝまで

とも那里まゐて人倘問ひ親兵衛に妙真許へ立去りてその投方へ罪の有つ侯ふ答へよと言語せらく吟味れば大家にもそうも知て仰せらるゝ遊莫密事の為使へとも身単ゆえに不便ふ思ふ切て一人い

倶しぬ。とゝを親兵衛聞あもて開いて盃を乞て口誼へ倶さぐい誰ふかも憚りて倶さるゝ快々ぬとゝそぐ

其大家ゆ聚くまゐる果て立別れ馬を乞て稲村を投てかゝり去を親兵衛一要時目送て今いまも心安し

と思へば便宜の港口なる舶公の宿に所赴て今宵下總の市河へ出船あるやと尋ふ舶公答て出船なり。

これぞ幸ふ追風よければ賃銀多く賜りね目今船を出べしとふ親兵衛再議及ばざる隨ふ銀を

取らて件の船ふ乗まゐ登時篙工両名飯櫃薪飲水の桶などを推乃て卒そ馬頭上へ程ふ親

兵衛ふ前ゞ後ふ跟て倶ふ水際ふ赴て他ゞ船を艤ふ等ゞ獨鵠立處れば長ゝ一日の沈果て黄

昏時候ふるゝ程ふ親兵衛ふ肚裏ふ思ふ現ゆ人の栄辱得失死一炊の夢ふ似て秋の

天の瞬間ふ晴曇ゝ猶果敢ふ抑我身昨日まで数百の士卒ふ將として館山の城主ゝ今日い

一僕身ふ從て萬里の孤客ゝ思ふ憂ふあれども那靈玉ふ我未生ゝ自然と得る宝貝ふて

年来這身の護ふ為ゝ主君の與ふ厚ふ薄情や土中ふ埋れて又ゝ人ゝ我命運も玉と

倶ふ長く光を喪ん祥ゝけん狹ふ思へば心の慨ふ遣る方もなく思ふ折ゝ忽然として後方よ

ゝ光明颯と見めて投石の似ふ物ふ当ん項ふ磯と中るとそゞ仆ゝ衣領ゝ滾隆ゝ九の命の

邊ふ住ゝと親兵衛嗟ふ駭て遽ゝくも衣の内ふ入れ撈ふ果て木栗子の大さ物

只一顆背ふあり訝ゝ合ふ出て見れば別物ゝ郷君侯ふ貸まゐ濱路姫の臥房の

下ゝ土中へ深く埋置れ仁の字の玉ゝけれ為ゝ怎麼ふ一ゝ度い訝ゝ又一ゝ度も鈍

びて。ばらく思ふ郷君ふ我這玉を豆ゝ惜むとゝ君侯の所望ふ從ふて那里留め措た

ゝふ靈玉我を慕ふ欲二重の瓶二尺の土中を出て路遥ゝ我懐ふ入ゝ嗚呼神ゝ狹靈ゝ哉姫上

病着癒ゝ物怪も亦鎮ゝれば這玉那里ふ要ゝと。伏姫神の神謀ふ計ゝ返さ欲

それのあるべき欲奇べ妙なり。その事稲村殿ゆへ知一召さぶらはんを縱ひ我王ゆへも恁る奇特を告まうさぬ。その俤藏置くべき影護所あり。後ゆ又あん疑ひを受るなあり。然ばとて今ばかり又稲村へ歸まゐりて禀上んに面伏へ左まれ右まれ吉凶禍福を神の隨意儘なるゆゑ。あくまでと尋思ひまゐらせ。懷ゆせ護身嚢の幼解ゆゑ。件の王を彼ゆゑ頂ゆ載る程ゆ嵩師母が高ゆ客人船に整へ追風なるよいよ宜しゆ快乘りのべと喚聲かゆ浦波暗む王莽時親兵衛を応々と答も果ぎ歩を早めて歩板架ゆ渡りて。件の船ゆ乘移るその間ゆ高工毎に帆裝へ。歩架を退てゆ漕出ゆ大洋ゆ浮宿の鷗兒靜るゆ淺瀬に上欲下つ總市河を投て走らけり。安下再説。その日稲村の城内ゆ義成の主千慮を盡して既ゆ大江親兵衛を他郷遣へゆ。隨即奥隷の老黨某甲を召よせて濱路が病着瘧ゆゑ。物怪ゆ亦鎮めゆ。これ今日より大江親兵衛ゆ夜勤の役を免へ。且徒をの所要あれば又親兵衛ゆ吟咐て他を他郷遣へゆ水路を行べ。今宵必纜を解くべん這度四個の家老ども。有司給事の老女們ゆ潟へ。ちろゆ恁るまゐよと仰渡まゐゆ。件の老黨兼りて退て君命の趣を送もるく御伺へ。

堀内貞行東辰相杉倉荒川四個の老黨有司近習の輩まで事情を知るよりなれば訝り思いざるを。那大江親兵衛ゆ大功の賞として。往他を舘山の城主ゆ召されつけるゆ若七犬士の所在を尋ねて伴ひ來たさん為のこゝろゆ始よりして件の一度を奉りる十一郎照文をどを相心ゆ軍に用ゆる親兵衛ゆ輕輕く然る使を仰付まゐゆ抑是甚麽る故をと咲くりのもまくりけり。然而あの次の日ゆ濱路姫の微床の壽祝ゆ是ゆより上総の殿臺る両八幡諏訪二社の神主ゆ忠告紛れられずとて上総還るを許これ又ゆる比龍田の城より幸渡れる五個の罪人安西出來小満呂復五郎天津九三西郎荒磯南弥六椿村隆三八們ゆ亦復獄舍ゆ龍置て虚実を糺ゆ問れゆ都て他們ゆ陳る趣始終毫も違ずと。是普善菊々利の村人們ゆ禀せ義と喧合て歸降の情願実事なるよりこの段ゆ愛ゆ折る。義成主有司ゆ知て。件の罪人們を赦免ゆ。この段ゆ龍田の老侯の仁慈るよりとゆ渡さる。又上甘理墨之介ゆ天津九三四郎ゆ故主ゆ人ども素ゆより是廢人ゆ。量義ゆ素藤ゆ吟味られる密ゆ段ゆ十且他ゆ神餘光弘の落涙るるゆ亦普善村の民毎の口碑ゆ紛れる。當郡舊家の後裔れ。

義成特に憐みを垂て長挾郡神餘村へ他ぐ屯字の地なるをもて那邊へ二百貫文の采邑を賜り天津九三郎後見して生涯を送らせよとそ諸役免除本領安堵の御教書を成し下されけれは九三郎は天恩欣び地に喜びて國主の恩を拜し奉りつゝ墨之介に倶して神餘村へ赴くこと幾程もなく愚之介の宿願を造り奴婢を使へ其身は生涯後見して徐に光明を送りけり是併瀧田の老侯并に當主の仁恕なり九三郎か這年来の孤忠の善報なるへしとそ近隣にも遠きあるのも皆彼へ語り續て後まで善談なりけり墨之介九三郎か其の下に詣るに又その恩赦の月に出来介復五郎南弥六か有司赦免の表を示して若し縱大赦の折にも數まへ元大罪なれとも老侯の格外なる御仁心なりしく守に宣へせよ」もあれは都て命を助られる上總へかり去きく思へ速に退り立初又這地に在まく願ひ事なれは月俸を賜りて城内に留置れ異日の功あらは提立のへべとありけれは四個の罪人皆歡びて恩を稱し額筑御て御誕兼りの仁恕に當國に我れか舊里へ立ち上總へいなんとを欲せは況以後の露命を數まへ月俸を賜るを願ふ大馬の力を盡して再生意外の洪恩を報ひなんとそ事中に隊八か上

總に光母のひへ椿村へかへりて親を慰めんとそ身の暇を乞まつりしに有司信と宥えあひ義成主憐愍あひて隊八か情願に九三郎に及へきを是亦孝子の心を耳く路費を取せよと仰下されけるに隊八か吸筆を賜はりて椿村へ返しあるを然はあく者も住る者も轍の魚の江湖の枯るを苗の雨に逢ひ幸に潤ひ唱て長く良善の人とそなりけり介程に隊八か南弥六か東介復五郎か別れて家路に赴くか罪障眼前の活地獄に懲りて俠客の交を要せは上總の宿所に還りて畊作の暇を毎に乞へ其の母に仕へ後々に至りて噂も竹えぎりしとそ徒て又義成主件の五人を赦免朝瀧田使者に遣して九三郎か五個の罪人を赦免の事の趣并に大江親兵衛に夜勤を免して士に招かれて其夜與に昨日他に遊歴の暇を乞へ徒と先侯に報ひ奉りしに義實主に聞て或は歎し或は評り什麼大江親兵衛を獨然に使へ只今猛に遣はけん」とて乞ひ先照文を書とせて主に示して問に照文に赦の意

その意を汲ずして他を稲村へ遣して義成主の事の情を尋ねさせんいさもの也とその仮黙止あり。話分両頭介程に草蜢里素藤は単人不入の山の庵を守りて妙椿の還るを待つ件の廿僧の生死あらろ約莫十有三四日を歴て三月も既に暮る時候その朝妙椿は忽然とかり来て獨縁頼に在りつかば素藤驚き且歎びて迎入れて計り事の成就あるや否と問へば妙椿答へて惚りのあるを問れども詳に告ずと思ひてかの素藤もかうち笑てその憑あるとかは鳥の聲水の音耳に聞くのみ友もなく這人不入の山守に徴して等る甲斐なりけりといへば妙椿頷て然いとよいあん豫ち身に示せしぞ。咱侍稲村へ赴て法術をもて城内に妖孽をのそして竟に犬江親兵衛を遠く他郷へ逐遣らんとのみ段の箇様々々と那假名曳の寃鬼に濱路姫の魘れて遂に病着なりしかば役行者とかせる假異人の示現の事是より館山へ犬江親兵衛を召寄せて濱路姫の宿直として七日夜勤をさせしかその折那霊玉を病の牀の箕子の下る土中へ埋めさせるまで説示て又かの姫の病着座アリ時候一夕義成に疑心を起さしめて要閑て那身一個濱路姫の臥房に行く折次の間に宿直をな

なる親兵衛を咱俗をもてその夜半より折恥らしめて義成主の他を召せば是等の所行も那霊玉を他に懐ふあるまじきとの仮思ひの隨に行ひ易く尚玉を初めて親兵衛が身に附てあらばいふそよくせんやうの段の妙なるを思ひ合へ然而義成主姫の臥房に男女の悄語く聲を聴て且濱路姫が親兵衛に贈りし假遺艶簡を拾ひ得て件の男女を推並べて数ふせんと性起りしかの折をもて親兵衛を結果すべ愉快れと濱路姫を殺さしていちん身の與を妙なりと思ふのみ悲難ふ義成の性として短慮の猛将なれば立地思ひ復して敢その氣を顕さず拾ひ艶簡を懐ふ夾ぬて臥房を還りて件の男女の中に刻衣をいそ人を知らずして艶簡を讀まぐ燔乗さりその艶簡に比堀内蔵人貞行と杉倉武者助と敷て大樟村より稲村へ旨くも還志遣りて御教書と同じ段をもて次の日再閲れば素紙なるのみ一あるを燔乗られしかも亦処又那回義成が夜深て単濱路姫の病牀に赴く折表第と奥の関の戸の鎖い必固りなを輒くも開ず思ひ咱法術で佶れども義成い訝りなるを後ふその弐を糾りも外ぬ是も亦親兵衛が所為なるべと

文溪堂蔵

思ひしならん。這一條は遠からぬ大隅昨の夜なるぞかし。その詰朝義成は親兵衛を召近着て、ひそかに招させ給はざる七犬士の所在を索ねて、倶して来よとて、遊歴の暇を食ふせ給ひけるが、瀧田の祖母の宿所にだにも逗留を免されず、急ぎて遂立られしかば、親兵衛は水路より其宵他御へ赴きぬ。那奴が在るを看るよまづ舘山の城を囲みつつ今宵一夜を過すべからず。非除又年を歴て親兵衛がかへりまゐるとも那玉をぞ還されずは水母の小蝦に離れし似く、要なき人になりなんのみ。奇々妙々にならぬものをと鼻春蝕めかして説誇れ給ふ。素藤怡悦に勝ずして耳を敧け膝を找めて听惚つつ、半晌許憶も止息を吻て、適愛たる尼姑神術、柳舘山の城を當各復さんは、又是甚麼なる妙計ありやと問ふに、妙椿冷笑て、其井も赤飯を炊ぐぞや。御前に寄隊の陣へ牽れて追放せられし躬方の士卒願八金作本膳碗九皮雑兵們は、ひろく當日副門より落亡る士卒も都て法術をもて、その日より這四下なる大山に潜せ置たれば、期に至てその処へ喚聚合んとも易かり。且前祝に酒を喫て姑且倶に楽むべし。酒菜は咱們が准備して五六種庖湢に在り。快会生しあひども、と云ふに素藤詐り遽しく身を起して、庖湢の板厨を開て見れば、果して鯛あり平

魚あり、或は皆菰路鶏卵まで皆悉調理をして、五六箇の青磁の碟子に装做してありければ、呆れつゝすぐに歎じ感じて、左も右も酒を温めて坐席へ舘をもて来つ。処狭きまで安排べて、妙椿と共侶に屡大盃を遣らも程に、又稲村より在りしを聞もてきつ酔て、倶寝の假枕結ぶは夢の穢語楽を渫りあるける。左右する程に日は斜にて下晡になりし頃、素藤は又妙椿に舘山の城をとり復さん術策を問ひて催促す。登時妙椿は枕擲遣り身を起して、雲霎時外面を瞻仰て、現今は好時候なるらん。隊那遠に潜せ置たる陰躬方の士卒を喚集んといふても縁頬に立出て、筧の水をもて手を浄め口を漱ぎて、外面に立向ひ、眼を閉て口に呪文を唱果て、跪て坐席より入りしかば、素藤はそのあるべきやうを見よとて向ひさまにひらくと思ふのみ、倶に外面を長視てあり。姑且して迫前向なる樹の間岩巌の蔭より走り近つきぬなる居ヨの人晌登然として吃えしまされば、素藤が故隊兵礪時願八平田張金作奥利本膳浅木碗九郎们残先に立て、一隊約莫三四百名、件の庭に取合ふる身皮都で寠果て、一刀さへも帯ざりけり。素藤は這の人々をうち見て、躯て縁頬に走り出、聲を掛て、先願八们に對面して、別後の苦楽を尋るに、願八

金作本膳碗九甲乙四個の老兒い言語齊一にして船を棄てられて武藏或い相模の浦へ追放されたり折八百尺谷の法術を雜兵奴隸に至るまで這頭に近く奥山へ皆悉領て返されたその事れ幻を水路を渡り來れば或い雲に乘せられて飛行して來れば欲我上るべく夢の如くて楚と覺ひに然るに料らずも金這四下へ返されかども太山れ食物を前徑を行客の盤纏を奪まく欲するに身寸鐵を帶ざれば思のまゝせん方なく草深き地方や山峰のまゝれば日毎に各捉啖ひて才に餓を凌ぐ在り介程に相公も亦八百尺谷の法術のそなく這頭へ羽て返されて這草庵に御座まり尼公の示教によりて少知るのみ今に對面を許されねば間近き山に在りなり一たびも訪なふべく各俱に艱苦を忍びて尼公の封助を待とるに今朝も尼公い稻村の城より出てかるさんと在下們ば躾在る山蔭に立寄りあひて妙術をもて犬江親兵衛を逐遣らへ一ゆるさば事の顛末を鮮示され信れば今宵館山の城をまり復さんと思ふ下哺れるん時候汝逆々咸相俱に咱暮の庭へ來よかと其期を知せゆひ谷在下們天に欣び地に喜びて時を移さず這里那里に潛居る

駐家れ兵毎に徇伺て日の不正を窺ふ一ふ只今尼公の吸せるを思ひ隨に忽然と都て這山へ來れければ毒も惱ず見參に入りなる一期の幸い何ぞ是に優ぎやそ甲唱れば續ぎて心も似たる四個の兇黨耳り聯辯の拍子よく一五一十の話說を素藤听く欣び感して今ゆく思へども甲も始よりて尼姑の封助に漏るへ虱ひ怎れば今宵會祝宴の羞を雪んと欲するに我ゆけ兵毎に大刀も弓鎧も怎麼何をもて二城の大敵を伐へやとの問に妙椿い奥より徐に出て來る素藤ふうち對して右の武具も咱術に曝に館山の城内へ犬江親兵衛に剥捕られる郎方の銕鎧刀鎗今も那城の兵庫に藏るくも今宵先法術をもて開て咸とり復して直即夜駕に用ゆ然が咱侏ぎの手來特に秘藏の宝貝に龔襲の手と号けり這手をもて風を祈れば猛風俄頃に吹暴れて屋を轟復し樹を倒す效驗一ひも差ふとる一因てあの宝貝をもて風を起して館山に兵庫を吹壞らて那武具をとり復さんに黄昏に成るに先や效驗を見ん と說示へ懷より錦の囊に收めた雞尾襲の玉を取り出て尼姑異方を向て朝に額に推當て合掌して一雲時咒文を唱れば疾風颯と吹起

玉を砂に飛、樹を鳴らす。奇特ふ駿く賊兵们ハ吹倒されて品川稜ふ各携り傾き乎ち頭を抬げ沼ざり
けり。偖り一程ふ日ハ暮て。這夜夜中の左側ふ怪むべ一風のまゝ草の庭へ尾刺くと立日と天より降る
もの。東西あらその數幾百ゐるとも知ぬ大家さとと意中ふ暁得ぬ。避て樸る者もなく隊東ハ折とれ倒るふ。
曩ふ親兵衛ふ剥れる。躬方の武具ハ皆ふ衆兜都て妙椿の奇術と感せぬ者もなく先素藤の
武具を尋合て縁頰ふ登り置ぬ。介後各認得ぬるふ。いそく撰合て鎧と撰て大刀を佩ぶ鎗
眉尖刀と携て逓愛ぬ武者態をそ。齊一笑局ふ入りふけり。然べ當晩の戰飯ふ各豫山蛤を喫く
捉り炙りゐどて腰ふ佩ふ。と合ふ少しつ或ハ樹の根ふ尻を撫け或ハ草を折布ぶ坐て飽ぬ。ち咲
ひけり。他们ハ墓田の隊兵ゐふ。主の家號ふ相似る。蛙と食とゐるの。実ふ是獅子身中の虫ふ。ち著
とゐいん。名詮自性思ふべ。問話休題。介程ふ素藤ハ黒草綾の甲一縮て臂縛蹬繳ふ身戎
固め黄金粧の大刀の二尺八寸ゐぬ。鷗尻ふ佩做て。刻室ゐ七首と挿添え右ゐふ戰魔を携く
奥ゐ徐々と出て歩り縁頰ふ建さぬる発見ふ尻をゐ撫て先着到を問ゐを。登時妙椿ハ素藤

夾衣小袖の尚巳の時許ゐふ黒紋天鵞鳥絨の帯を前ゐ結び黒絶子の袈裟を撫て故意法衣を着け
ぬ。水自紋紗の阿高祖頭巾を最も目深ふち被り。ふ一口の戒刀を引提て縁頰ふ立出て願八盆作
们ふ對ていはく。咱俤這貧の水ふ今朝より屡加持をゐれ兵毎ふ快ゐ偽て人別ふ這水をて両眼を
洗せゐべ。佐野十五の烏夜とも物を見ると明亮ゐん。今日ハ四月朔ゐれ月を忘ゐて不便と然ゐを
躬方の士卒们ハ烏夜とも眼明ゐべ猫兒の鼠を捕ゐゆ勝て。敵と較ゐふ自由ゐべ。咱俤も蟇
田大人と倶ふ館山へ赴て悄ゐ地ふ徙を行ん既ふその准備と轎子ハ背門ふ在り。雑兵们ふ吟咱
咱俤と乗せそ。とゐふ願八盆作ハ一試ふ及ぶゐ果て。時を移さぬ隊の兵毎ふ件の薬を偽
へゐ。皆欺て先を爭ふ。ゐも貧の水と。各眼を洗ひけり。その折風ふ既ふ止て夜ハ子二刻の時候ふ
素藤星を瞻仰て。時分今ぞ。兵毎立ね快々找ゐと下知ゐ。発兒を放ちゐ下立。その間ふ
雑兵们ハ背門ゐ轎子と吊りそ歩ゐ。卒とそ縁頰ふ卑寄ぬれ。妙椿躰ちち乗ゐ。拍起
素藤の後ふ跟てそ倶ゐけゐ。佐而墓田素藤。その隊の賊兵二百名先鋒後隊と隊位を

整顔八金作本膳碗九并に本膳ゑ獨子也奥利狼之介出高と唤做る今茲十八の後生们を前後左右に従て山路を連りに急ぎ行くに間けれども那水也眼を洗ふる效驗るりけん衆兵一個も後るゝもめる思ひよらもなく來て館山の城の後門に推寄せる折襲々と譙楼の太鼓の音ゆゑそ丑の初刻にぞりける。話表館山の城内なるの日稲村殿義成の御教書到来て大江親兵衛仁ゆを夜勤の役を免しめゆて七犬士を迎の與隔昨猛可ふ起行てその投方へ遣れり是ゆゑ逆時良千景能们倶に館山に勤番て弥滋田断ゆくよくその城を守るべと仰渡されそりけれ件の三士を訝りるゝ。親兵衛ゑ這里に在ゑもとて守るふかるれるに倶に思へ懸念せを躰と兼書をまゝすを下知と士卒に告今。その急を敬言めけり。徒り一程に。その各基風吹起りて或は城下の廬舎を倒し或は城内の樹木を覆せ風の勢ひ凄しくて現平ゆゑ亦宵へければ城下並に普善寺鮒々利の村人の各戸を閉風を害怕れて外に出るめるりけり況館山の城内の田税逆時登桐良千世屋景能们らく士卒を敬言めて毫も睡ることりけるに風いよ〳〵烈しくて這夜東の郭る兵庫両座許壊れるゝ

黒白も弁ぬ良夜ゑれに今はふ何とも既天の明るを等てそと敢馬に繰ぐ者あれば要る武具を れば徒而子時過る時侯猛風も尽く止ふければ士卒们倶に心ゆ安て各睡りに就ふけり。亦程に草蜜田素藤に三四百の賊徒を領て既に城の後門に寄せ来ふければ妙椿に轎子より出て素藤に其次くやう這城内に昔より一箇の脱路あり。今人れを知れば其里より入れば便宜るまじも。年来千曳の石とりく出口入口を塞ぐれに目今いせんもべおれば徒れば塹へ架梁を渡して入らんのみにでいとも。はも懐より一條の麻索を含出て城に向て擲ちければ。その索長く閃に具て八九丈前面るに塀の上に横るとそ仮忽然として巧成る雲の梯のごとりふけり。妙尊般も及ざるゆゑ段に駭ぎるめるく。一霎時長視て左右るに渡る者るりしと素藤頻に焦燥て既に渡の就るに快々找めと下知れば性急雄の賊徒五七名各鎗を挾て。這架梁を渡るに危気も乗に見えれに大家倶に続て。輒く渡り果る程に妙椿に素藤を先に立て共侶に渡りて城に入りけり。然れば賊徒に隊より。室内知るゝ第二郭まで潜び入て常夜燈を打滅々明を吸と並ぶ。諸役所に殺入て短兵急に攻れば睡端

多城の士卒ハ倶に駭き起出るに鎧擐る間もなけれバ各素肌に短鎗を引提或ハ弓箭を携て稠人に
敵に立逆ひつ齊一防ぎ戦ふもあらず如法闇夜の進退便なく敵の多少も量り難しに賊徒ハ目子明
亮して烏夜にも迷ハ着なきに又妙椿が幻術ありて其勢数千あるぞあり敵城内に充満て錐を立べき
地もあらねバ城の士卒ハ防禦に由なく驚き慌て度を喪ひて鼓噪ぞめきけり当下願八盆作ぞ
真先に拔む聲高やかに當城の奴们ハまご知るや我ハ主君蟇田殿の相公會稽の恥を雪んとて當晩數
千の逞兵を領て當城を合る復しあり番士の頭人田税逸時登桐良干们ハ那里に在る命惜くバ面縛
して降参せよと喚りくる勢ひ潮の沸く似く古昔の義秀親衡くも敵すべくもあらざりけり恁る程に城の
頭人田税戸賀九郎逸時登桐山八郎良干苫屋八郎景能ハ夜撃なりと聞しよりいと早く兵具を身に固
めて刀鎗引提走出烈しく士卒を罵励まして三士齊一敵を拄えて瞬息間に幾人歟早鎗下に刺伏れども
敵ハ視るに餘る大勢なれバ素藤を擇撃ふせまく思ひ甲斐もあらで各浅痍を負ながら這里を先途と戦
ふ程に登桐山八良干ハ本膳碗九郎を左右に受て連りに戦ふ大刀風に當るべうもあらざりけん件の二賊を

○二ゾク

後より拔む躬方に譲りて引退くを良干ハ肯脱さずぞ焦燥り随に脚下なる屍骸に撲地と跌きて
忽地撞と輾びしかバ賊徒ハえたりと幾人か推累りて生拘りけり当下の折逸時景能ハ一所に敵を拄えて良
一歩も退ざりしに士卒ハ過半数なく捕られて良干虜になりしバ怯れるにあらねども逸時佐と尋思をして
拔む景能を推禁めて倶に退きて談するやう吾儕八郎苫屋生目今戦殺あるとも落城の不覚ハ償ひ
がたし所詮命を免れて異日賊将素藤を狙撃るべく倒に忠臣勇士の名を揚やせん和殿の意見甚
麼ぞやと示す景能點頭て足下の主意定に理あり事一旦の恥を忍びで狗死をせざらんハ大丈夫の本意に
あらず快落ぬべし卒共侶にと悄語ひつ鎧を脱棄て落る躬方の雑兵の中に交りて後門より出て徃
方も知ずなりけり然バこの夜の戦ひに城内の士卒都て五六百名僅に命を免れしハ二百名に過ざるべし其の
宅ハ賊徒に撃捕られて血ハ流れて盾を流し屍ハ積れて累をなしり恁而夏の天明しかバ素藤ハ先士
卒に城の四門を守らして首実検をせられしに宗徒の城兵田税逸時築に苫屋景能ハ戦闘の間に落亡
たりけんそれと思ふ首級ハあらず單登桐山八郎良干ハ願八盆作が隊に生拘りて重索掛て雑兵に牽して

廣庭ふ推居さり當下墓田素藤へ癸児ふ尻とち撫る左右ふ本膳碗九郎以下の兇黨と侍らしと意気揚々さる面色ちて良干と伝と見て爾い登桐山へ狩謹て我のふりと听け原這城地い我義兵をのそ自然と得る所ふて義成ど城ふ向ひ且我いちの年来里見ふ忠あり功あり〜ふ義成敢その義を思ひぞ慢ふ我を侮り〜ふ事遂ふ干支ふ及ぶて鄭重ふ篭城ちる折那大江親兵衛ど幻術ふ眩惑せらそ一旦俘ふ為り〜かど我英雄と虜せざる天の恵神の助あるその故ふ義成い我を誅ちと克ハで士卒と倶ふ追放ちあるべきなりと我又来て亦我城ふ據ちるの〜絶ふ三十餘日の内ふ〜数千の士卒と聚合て合戦ふ恥〜雪めるる武畧ふ胆い淡れけん志を傾けて今より我ふ従ひ功あらん折重て用ひん徒て命い惜〜ぞや。

とかいせも果ぞ良干い眼を瞪〜一聲ゆう立て金れ素藤過言ふ亦い原是刑餘の山賊皇義ふ奸計を旋らくふ鞠谷の所領を奪今るるその悪近曽露れより人食れを知ざるる。況国主の恩ふ叛て御曹司を捕りちゆり虎狼蛇蝎の威を振ひ〜ふ我神童大江ど為ふ若们兇黨数と盡と既ふ俘ふ〜れを大江親兵衛ど意見ふよりて国主の仁慈如来ふ帰〜く首を續〜ゆ〜ふ虎狼の心そのそ。

事今ちふ及ぶも国主の大軍ち向ひ朝日ふ霜の解る像く誰ち一人も漏さるべ覚期をせよと勇士の奮激思ひの隨ふ罵れ素藤勃然と怒ふ沼堪ぞ其奴甚無礼先その舌を引抜ひ快ゆせよと敦圍ひ〜を妙椿ぞて遽〜く屏風の背より走出て素藤を諫ちる良干ど非礼過言最憎ひ兇のとハ〜ふ怒ふ無あて殺ち要ち〜姑且獄舎ふ繋ち〜て志を改ち兇許ち〜て用ひあか〜又日を経て帰伏せ〜ちの折誅戮せれんのを急ぐ短慮ふ付ちびやとひふ素藤怒を鎮めて現他い然る者ど萬卒い得易ち〜て一将い極て獲ち〜ち兵毎ちの良干を牽立西ひて獄舎ふ繋ぎれ由断ち〜て令ちる脱ち〜と言語を急迫ひ〜て知ふ後ふ賊兵们い羨り奴と咎て躯て良干の索令ふ縮て牽立れも良干ハ高罵り已ちぞ聲涸ちまで嗜り〜を本膳碗九以下の兇黨ぞくふ堪ぞ目を注〜ひ〜と憎〜と味ひ〜り徒て又素藤へ郷ふ弟潜ふ軍民の強顔く當り〜報ひふそ礪時願八平田張金作ふ居ちの雑兵を従て普善蘇々利の諸村へ遣〜郷ふ出〜遣〜れる兇黨の妻子ハ〜ち初城内ふ在けと在〜ぞり〜ふ管ふぞ年少く顔美ハ咸令ふ入れて賊徒ふ這回の賞ふ取せ又後堂ふも召入れて妙椿の使用ちる又只ちの〜のちる〜ぞ豪民ふ催促て戰栗軍要金を

不人時
うん九郎

逸時景能脱虎口
良干奮
激ち
素藤を
罵ら
ぐうん八
不ん他
うゆ紀

ヨリ遣令ル又十六歳ヨリ五十歳ニ至ル民三三百名ノ城内ニ驅入れて都て軍役ニ使ひ〻其勢六七百ニ及ル武田信隆千代丸豊俊の残黨の尚近郡ニ潛居ルを素藤復起りぬと聞知て西黨都て六百餘名野幕砂鴈太仙駝麻吉茄六と唱ひ做せ者を頭人として金舘山の城に走る素藤ハ家屬ハ〻素藤勢ひ壯ンなりて敢國主を憚らず隨即妙精を軍師として天助尼公を尊稱し軍議の外ハ後堂に常ニ侍て夫人の似く夜ハ悄々地に枕を並べてその徒の思ひとを羞ませず却願ハ金作本膳碗九郎ニ禄を与ヘ〻暇兵を授け重用始ニ弥倍ハ〻件の四兄ハ素藤に薦めて美濃の豪民の米銭を責令ル倘推辭む者あれハ立地に推寄せて屋廬を破却し資財を奪ふ乱妨淫りなり〻豪民ハ〻驚ハ怕れ僅ニ宅着を撤て逃て他郷へ走るもあり然ハ近郡騒動して風聲今朝より賢ハ〻稲村ハ注進の人馬ハ櫛の齒を挽く像く将門叛て東路に風噪ぎ純友起て西海の浪暴かりしも恁ありけん弥と思ふ可の人心沾まるのみなりけり單表上總の殿臺なる八幡諏訪三社の神主梶野葉門ハ隔昨上總へ還ることを許されて昨日殿臺なる宿所に歸着ぬ此日あの夜舘山の

城に凶変あり間近なるを聞ハ素藤ハ再叛て件の城を攻囲りしとの風説耳ニ入ル詰豆甲乙俱に知て駭く〻天〻なるハ素藤又館山の城に據りて猛威を振ハ〻鄙に我〻ハ逸早く國主に注進たらんと憎ミて必害を蒙ん今番も亦稲村へ走りまわりて吏の趣を注進せバ且ハ那里に在留て賊徒の害を免るべれと示し合ル兵伜に其旦所に宿所を出て勉て路次に出ハ〻這回を又稲村ハ注進の第一番に其忠告を賞せられ則他〻ハ願ハ〻のまゝ城内に留置ハ程に処々より注進ヨリ次〻又館山なる射方の城兵の數も漏されハ〻二百許名漸々に脱れ来て報るを聞く昨夜墓田素藤に城を落られる事の顛末城の頭人登桐山八良干ハ生拘られ田税逸時甘屋景能も落亡さるる戰殺せ弥その存亡を詳ニ〻賊徒ハ數千の大勢に郭内錐を立る地も〻八面敵なるハ似ざいふて繰入れられけん第二郭に起り立つまで音もせざれバ城の士卒ハ夢にだもこれを知ざ是故に度を喪て落城に及ひ〻又その甲夜より猛風起りて兵庫を壞られる其頭のまで具る衆口錯ざりかハ君臣上下驚ハ呆れて既に評議區〻なるハ義成主ハ昨夜より猛可に脚

疾あり。醫師ども脈を診ふ。ゐを御氣ふをいまもとて。隨即連ふ湯薬を薦めまゐらせ折ふけるを。評議の席へ出あるを。先上總の諸城主へ御教書を遣さべーとそ。その書ふ載られる一ケ條ハ素藤再叛の罪えありとふとも各ハ先度の如く城を守りて動くべ。此ろ征伐の使をも。速ふ誅戮さべ。東兵郎里ふ在陣の間倘戰米の所要あらば。その折下知ふ隨て。毎ク本陣へ運送せられよと示さるゆふ諸方へ急脚の使者を部して。その日齊一當城より出遣らるゆけり。偖て又義成主ハ杉倉氏元堀内貞行東辰相荒川清澄と俱ふ四個の老黨を便室ふ招ぎ寄せて。然而宜ふ今番素藤ゑ再叛のゆ賊徒大勢ゑとへども。先度の戸ゑ含まれる人質の憂ひもるし。我速ふ打向ふて那城を攻落。素藤并ゑ兇黨を誅せんと輒ふ所べ。ふい。ふせん我身ふ昨今病着あれば馬ふ乘らんゆ不便ゑ。然ばとて我病着の癒るを待ゆ賊徒ふいよ勢ひ漲ゆ民の途炭ふ及びません。汝達各意見あらば專さべーとそ仰け。這回ふまゑ盡さゆども。楮數ふ定限ふ是より下の話説ハ又卷を更めて第一百十二回ふ解分ると聽ふか。

南總里見八犬傳第九輯卷之十終

東洋學藏